統計数理 (1992)
第40巻 第2号 227-234

公開講演会要旨

日本人の国民性

統計数理研究所 名誉教授　林　知己夫

(1992年11月6日，統計数理研究所 講堂)

要　旨

1953年に始まった日本人の国民性調査は5年おきに繰返され1988年まで35年を経過した．ただ繰返したのではなく方法論的発展があり，これを通して日本人の姿が客観的に描かれてきた．加えて，日本の特色をみるために日系人調査を始め，これが意識の国際比較研究へと発展していった．世界の中における日本人の普遍と特殊，日系人がその間でどう係わりあっているかを通してみることのできる日本人の普遍と特殊，を時系列データ分析を加味しつつ明らかにしてきた．

このような難しい問題においては方法論の研究なくしては突込んだ知見は得られるものではない．我々は，各国の似たところと異っているところを明らかにするという立場から，連鎖的比較調査分析法（Cultural Link Analysis: CLA）を開発し研究を進めている．これは，文化・民族の同異の相の連鎖，質問内容の特殊と普遍の連鎖，時系列の連鎖を含んでいる．いかに比較可能なデータをとるか，いかに分析してかくされた心の構図を描き出すかが中心問題であるが，正に「統計数理」の核心に触れるものと言ってよい．

今回の話は時系列調査を経糸とし，国際比較を緯糸として織りなされた曼陀羅ともいうべきものから，日本人の国民性を中心に説明する．

はじめに

国民性とは何かを細かく議論することは，そういう分野においては重要なことかも知れないが，具体的に国民性を取り扱おうとする我々にとっては不毛の議論である．いくら厳密に定義したところで，これを具体的に捉える実際的な方法の目途が立たないからである．我々としては，ものの考え方，見方，感じ方（belief systems, the way of thinking, emotional attitudes or sentiments）というものを国民性と考えることにする．価値観，価値意識，社会意識等という言い方も出来るが，隔靴掻痒の感があり，やはり国民性と言いたい．国民性研究の始まりはWilhelm Max Wundt (1832-1920, Elemente der Völken Psychologie (1912)) であると言われているが，国民性という言葉を使うことは，今日学問の世界ではあまり流行しておらず，アメリカのAlex Inkelesがあえて「アメリカ人の国民性」という言葉を使っているに過ぎないが，彼の議論は我々にぴったりしている．何のために国民性を研究するか，これについてはすでに論じてあるので繰返さないが，次の点だけをあげておく．文化の興亡を考えるとき，国民性が大きな働きをしているように考えられる．文化は伝統・継承，内外の刺激を受けとめての創造・伝達という内環的プロセスのダイナミックスがうまく機能し，存続している限り発展しているように思えるし，伝統・継承のみのときは衰退し，逆に創造・伝達のみのとき永続的な発展が

表1.　国民性調査（KS）および関連調査一覧.

西暦年	全国調査	地域調査	吟味調査	国際比較	
1952		○国民性準備調査（東京）X, Y 型質問票			
			○質問理解度調査		
1953	○ KS Ⅰ	○東京・大阪比較調査			
			○有識者調査		
1954					
1955					
1956					
1957					
1958	○ KS Ⅱ	○青森・鹿児島比較調査			
			○岐阜吟味調査		
			○学生調査		
1959					
1960					
1961					
1962					
1963	○ KS Ⅲ		○岐阜準備調査（KS Ⅲのための）		
1964					
1965	○国民性予想調査				
1966	○全国パネル				
1967	○（社会現象の統計的モデル化のための調査）				
1968	○ KS Ⅳ				
1969			○岐阜パネル調査（面接と自記式の比較）		
1970		○県民性調査(鹿児島，山口，大阪，東京，岩手）			
			○岐阜パネル（4回，自記式）		
1971			○	○第1回ハワイ調査（日系人）	
1972					
1973	○ KS Ⅴ				
1974					
1975		○意識の基底構造調査（お化け調査）			○フィリピン調査
		（東京）○岐阜パネル（3回，面接）			（バギオ，ライオンズクラブ）
1976		○（米沢）○			
1977		○（東京）○東京社会意識調査			
			（面接と自記式の比較）		
1978	○ KS Ⅵ			○第2回ハワイ調査（ホノルル市民）	○東南アジア学生調査（タイ，マレーシア，シンガポール，インドネシア）
				○アメリカ本土調査	○日独仏自然観の国際比較調査
1979			○岐阜パネル調査		○社会的態度基底構造
1980			○（面接と自記式の比較）		○国際比較調査(東京)
1981					○日米大学生比較
					○社会調査による国際比較
1982					○　　（東京）
					○日仏データ分析
1983	○ KS Ⅶ			○第3回ハワイ調査（ホノルル市民）	
					○日・ハワイ・仏データ分析
1984		○新しい価値意識の調査（関東地方，自記式）			○
1985					
1986				○意識の国際比較	
1987				（ドイツ，フランス，イギリス，日本，アメリカ）	
1988	○ KS Ⅷ			第4回ハワイ調査（ホノルル市民）	
1989					
1990					
1991				○ブラジル日系人調査（ブラジル全国）	
1992				○イタリー調査	
1993				○オランダ調査	

望めないというように考えられる．これを根本で支えているものが国民性であるまいか．さらに国民性というものは，これからの日本を考える上でも，国際場裡における諸国の行動を理解し予測する上でも，無用の文化摩擦を避け国際相互理解を進める上でも，また，夫々の国の人間社会事象を按ずるに際しても肝要なものであると言ってよい．

国民性のような問題では厳密な定義はなくても“それらしい”定義で十分である．こうしたものを論ずるのにさまざまな立場があるが，我々としてはこうしたものを表現するのに計量的立場をとっている．すなわち統計的方法を用い，行動計量学的な立場から，国民性を考えていくのである．名付けて計量的日本人論といい，他の諸方法によるアプローチと一線を画しているのである．比喩的に言えばこの立場は仄暗い国民性という調査の中で，これまでに得られた知恵をランタンとして照らしながら性格のよく知れた質問群をいわば道具として用い，あちこち叩きながら国民性を探索的に明らかにしようとするものである．これは，かなりよく解っている対象に対しては有効な方法である仮説-検證という考え方ではなく，上昇螺旋的に「方法と得られた成果」を交互に深化・拡大しつつ高めて行くもので「調査の科学」という理論的立場に立つものである（これは，林知己夫：『調査の科学』(1984)，講談社にも詳しく書いてあるが，今日入手し難い）．

日本人という対象を具体的に即物的に規定し，これに対して操作的な観点から調査・分析を繰返し，“国民性”にアプローチしていこうとするものである．

××年×月×日，日本国籍をもち，日本国土に常住する20歳以上のもの，さらに具体的にすれば，住民登録ないし選挙人名簿に記載のあるものが日本人と定義される．年齢区分は時に応じて変えても差し支えない．これを土台にランダムサンプルを作り，これに対して日本人のものの考え方，見方，感じ方を調べるために調査票を作り，一対一面接調査法によってデータをとるものである．このように得られたデータを分析し，データ構造によって明らかにされる日本人の心の構図，意見分布，部分集団の様相，それらの時系列的様相が，日本人の国民性を表わすものとなるのである．

このために，1953年に第一回の調査を行い，以後5年おきに調査を繰返し，1988年まで8回の調査を行い35年間を経過した．さらに1970年頃から国際比較を行い，その方法論を開発しつつ，後注に示すような考え方に従って国際比較を拡大しつつそれを通して日本人の国民性を浮かび上らせることを努めている．

日本人の国民性研究がどのように発展してきたかについては［統計数理研究所国民性調査委員会，『第5日本人の国民性』(1992)，出光書店のV章，林知己夫：日本人の国民性研究のあゆみ，265-289］において論じてあるので参照されたい．

なお，国民性調査とその国際比較関連調査は表1に示す通りである．

I. 日本人の国民性のさまざまな表現

データから日本人の国民性を表わす仕方はいろいろある．これについてその種々相を述べてみたい．

(1) 我々の考えている大多数意見がまず日本人の国民性と考えられる．全体で2/3以上の支持があり，男・女のそれぞれで，また各年齢層に於て（サンプル数を考えて操作的には10歳刻み，年齢の高い所では70歳以上），さらにどんな学歴層においても2/3以上に支持される意見である．一応の属性分類にかかわらず2/3以上に支持され，属性によるバラツキの比較的に多くない——バラツキがあっても2/3以上の大多数の中でのバラツキである——意見である．ま

た，‘わからない’という回答が多く出れば大多数意見になり難いので，とくに難しい質問では大多数意見は現われがたいのである．

この大多数意見が，時間的にみても変化することが少ない（つねに多年月大多数意見であり続けることは必要である）ならば，さらに確固たるものになり，外国の結果と比べて高い比率を示しているならば，さらに特徴的になるといえる．

(2) 意見構造というものに特色があれば，これは日本人の国民性といえる．構造が時間的に安定を示し，外国と比べて特徴を示すものであれば，さらに強固なものとなる．もし，この構造がある変化の様相を示すならば，この変化の様相そのものも国民性ということができる．

(3) 意見分布そのものに特色があれば，これも日本人の国民性といえる．分布が時間的に安定を示し，外国と比べて特徴を示すならば，さらに強固なものになる．もし意見分布がある変化を示すならば，この変化の様相そのものも国民性ということができる．

(4) 属性別の意識構造，意見分布のあり方も国民性ということができる．これが時間的に安定し，外国と比べて特色があるならば，すぐれて国民性ということができる．つまり，部分集団の構造，様相のあり方そのものが，日本人なるものの特色を示すからである．また，これらが変化を示すとき，この変化の仕方そのものも国民性と考えることができる．

(5) 意見の変化に対して，時代や，加齢，また世代（生年によって規定される）がどのような形で寄与しているか，これに加えて年齢コウホート分析の結果そのものも国民性となるが，これが外国と比べ特徴的であるならば，さらに強固なものになる．

以上のように種々の立場から国民性を考えることができるが，恒常的・特徴的なものが“固有の国民性”（狭義の国民性）と名付けてよいであろう．しかし，日本人が人間である以上，時間的に変化する意識もあるし，諸外国と共に普遍的な性格を示す意識もある．広く考えれば“固有のものとこうした変化する意識の様相・共通の意識をあわせて国民性”と考えるのが望ましいと思う．つまり固有と普遍（時間的に，空間的にみて，異るところ・同じところの様相）をあわせてそれらの絡み合いと共に国民性とみるのが至当であろうと考える．

国民性研究は，こうした両者をさまざまな角度から上述の意図をもって，諸相をはっきりと仕分けしつつ調べることといってよい．これを価値観の研究，国民意識の研究と言いたい人は言ってよいが，要点は問題意識のあり方である．

以上のように考えると，データ全体が日本人の国民性研究ということになる．ここでは，主として固有のものを中心に取り上げて論ずることにするが，時系列データは国民性研究の35年にわたるものしか見あたらないので，時間的安定性の立場からはこれしかない．しかし，そのすべてに外国と比較できるデータがあるわけではないし，外国のデータはあっても，その時系列データは多くはない．したがって“固有のもの”を論ずるといっても自ずから制約はあるものである．外国のデータは，必ずしも同じ質問ではないし，時間的に安定しているかどうかの保証はないことも考えねばならない．したがって，ここで述べてきた様々な見方から，国民性に関するデータを示すのに自ずからレベルがあることは承知しておかなくてはならない．

以下，外国との比較をも考慮に入れる時，このデータとしては，主としてアメリカ，イギリス，フランス，ドイツの1987-1988年のものを用いる．このほか，日本人の国民性を浮き上らせるためにハワイの日系人調査（1971-1988まで4回），ブラジルの日系人調査（1991）も分析に加える．これらの日系人に残っていて，しかも日本人に特色的なものは，やはり日本人の特色と考えてよいであろう．なお，最後に日本人と言っても外国人と同じところと異るところがあることを知ることも上述のように大事なので，その一部をあげておくことにした．

II. 継続データからみた日本人の国民性

1. 大多数意見としての国民性
2. 人間関係
   暖い人間関係が日本人の特色と言える．日系人が外国人に較べて日本人に近い点は日本人の特色を裏書きしている．
3. 近代対伝統の考え方
   多くの事象において伝統と近代を対比させて考える考え方が強固にみられたが，今日はこれが崩壊しつつある．とくに35才以下では殆ど見られないが，55才以上では昔通りの考え方が残っている．
4. 自信と自虐意識
   日本人は日本人としての自信は増大してきたが，悪い面に着目するという見方が強くある．
5. 全意見分布が特色
   意見分布そのものが日本人の特色ということが明らかになった．一つ一つは特色と見えないが積みあげた総括が特色となっている．
6. 意見の変化・属性別特性が特色

III. 国際比較からみた日本人の特性

前記5で述べた総括が国際比較からみたとき，総括して日本人の特色であることが確かめられた．

1. 中間的意見・中間回答
   日本人にこうした意見が多いこと，日系人も非日系人に比べてこうした意見の多いことから日本人の特性ということが出来る．
2. 極端な表現が少い．
3. リーダーシップ
   日本的リーダーシップの特色は人間関係の重視にある（集団のメインテナンス重視）．
4. QOL 調査に関連する意識の未分化
   QOL 関連では，ポジティブ・ネガティブ・中間という風に意見の分れることは同じでも，日本人ではポジティブの中が領域別にあまり分れず未分化の傾向が強い．
5. 科学文明観
   一般的に科学文明に対してポジティブの態度を示すが，心の問題に関係してくると科学は踏み込み難いというネガティブな態度が多くなる．
6. 自然観
   自然に対する神秘感と自然に手を加えること・人工の加わった自然の好みとは独立である．

IV. 意識の国際比較の観点からみた日本と外国との同異の姿

1. 同一スケールの存在と国のクラスター化

比較調査に用いた全質問のうち人間関係に関するもの，その他，宗教など質の異ったいくつ

かの質問を除き，質問を次の領域；

（ア） 経済と帰属階層意識
（イ） 不安感
（ウ） 先祖，家族，宗教
（エ） 科学文明観
（オ） 健康観と生活満足
（カ） 金に対する態度
（キ） 経済に対する態度，これからの見通し
（ク） 信頼観
（ケ） 家族に対する近代・伝統

に分けて分析すると，どこの国でもポジティブ-ネガティブ，伝統-近代，楽観-悲観などと名付けられる一次元尺度を作る．こういうことはボーダレスの考え方であることが注目される．

しかし，この中で国の位置付けを考えるとアメリカ，日本，イギリスが近く，ドイツ，フランスが離れるという三極構造が現われた．日本とアメリカはこうしたことでは近いが，人間関係や中間回答の多寡においては両極をなしている．

2. 個人の回答パタンと国の位置付け：その1

スケール化した質問の中で個人の回答パタンを土台に国の特色を2次元的にみると，第1軸で（日本，アメリカ）（イギリス）（ドイツ，フランス）という形が出，第2軸で日本，アメリカが分離し，第2軸で日本寄りにドイツ，アメリカ寄りにフランスが分離し，イギリスは中央にとどまるという形である．いわば正方形の各点に，日本，アメリカ，ドイツ，フランスが位置し，中心にイギリスがくるという形で，似たところと異ったところの関係が，こうした質問群によるスケールの間の関連性のなかで浮かび上ってきたのである．各国のまわりにあつまるところは，

日　　本（信頼感あり，主義中間，経済中間，不安なし）
アメリカ（先祖を重んじる，科学文明観ポジティブ，非金志向，家庭中間）
ド イ ツ（家庭近代的，先祖重んじない，科学文明観ネガティブ）
フランス（不信感，社会主義好み，経済わるい，不安大，健康悪い）
イギリス（金志向，中間の考え方）

となった．

3. 個人の回答パタンと国の位置付け：その2

こんどは，人間関係を除く全質問を用いて分析してみたところ，日本，ヨーロッパ，アメリカという三極構造となった．ヨーロッパのうちイギリスはアメリカの方により近い．一言で各国の特性を言うならば，日本の中間回答好み，宗教は信じないが宗教的な心は大切，アメリカは先祖を重んじ宗教を信じ，宗教的な心は大切，プロテスタントとの関係はより密接，ヨーロッパは一般に暗いイメージ（特にフランスに於て）で家庭観の近代的な方により関係深く，より社会主義好み（特にフランスに於て），カソリックとの関係がより密接，という形が描き出された．

後注． 連鎖的比較調査分析法，CLA (Cultural Link Analysis)

この方法についての詳しい説明あるいは見方をかえた説明は別に発表があるので，ここでは次のような形で最も新しいものをもとに簡単に説明しておく．

1. 経　緯

ハワイの日系人調査を通して逆に日本人の考えの筋道――我々が持っていながら明確に客観的に描き出し把握し，これを世界の人々に理解させることが難しかったもの――を知ることが出来，この上に立っての意見調査の量的意味を示すことが可能となった．ここまできて，国際比較を進め，日本人のみならず諸外国の国民性（ものの考え方・見方・感じ方をこう総括して称するわけであるが）を計量的に描き出そうと考えた．勿論，考えの筋道の明確化の上に立つ研究である．ハワイの日系人のみでなくハワイの非日系人を含めて考え，さらにアメリカ本土のアメリカ人（非日系人）の調査に手をつけた．ここから出たデータを分析していると，同じ考えの筋道のあること，異った考えの筋道のあることが解り，このように似たところと異ったところを明らかにすることが国際比較では必要であるということを知り，国際比較の方法として連鎖的比較調査分析法（CLA：Cultural Link Analysis）という方法論を作り，この上に立って調査を進めることになった．この方法論はいかにして比較可能な調査を組みあげるかが根本理念となっている．

2. 連鎖的比較調査分析法

前に少しく触れたCLAの考え方である．比較は全く異ったものを比べても，ただ異るというだけでそれだけのものである．どこの文化圏に属する人々にも同じところと異っているところがあり，この絡み合いを知ることが大事であるという観点から比較を進めることが理解の鍵となる．前に述べた日本人-ハワイの日系人-アメリカ本土以外の生まれのハワイの非日系人-アメリカ本土生まれのハワイの非日系人-本土の非日系のアメリカ人という鎖はある点で似て，ある

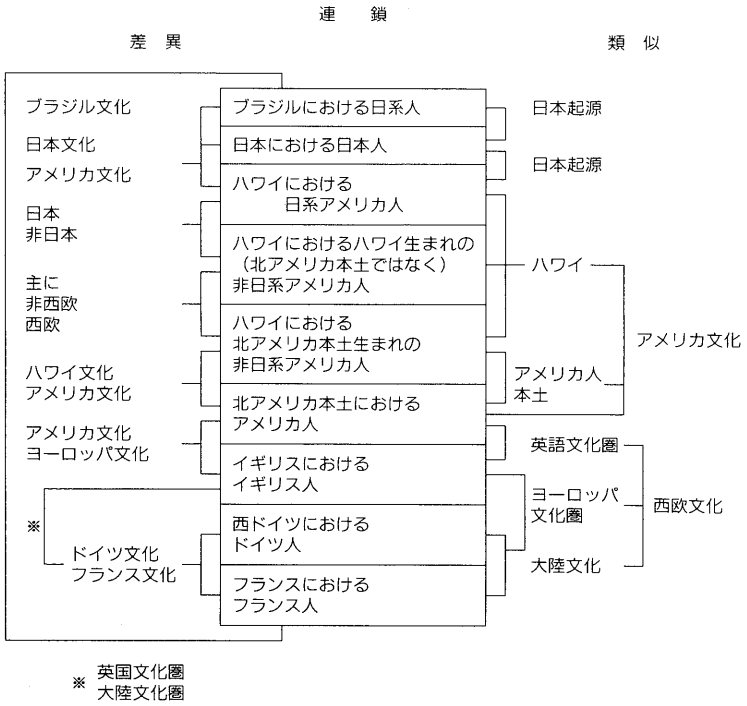

図1．対象の連鎖．上端のブラジル日系人と下端のフランスは，ラテン文化の中にあるという点で類似し，日本起源とヨーロッパという点で異っている（林知己夫（1992），*Statya*，7月号，p. 13）．

点で異った性格のものである．これを文化圏の鎖という．

これを広げ，本文にも説明したところであるが，図1のように連鎖を組みあげている．

質問での鎖もある．各国は各国固有の考え方・感じ方（考えの筋道）というものを持っている．これがどこにでも通ずると考えると大きな錯覚になってしまう．日本の特徴的な質問は日本人らしさが抜け切らないし，アメリカの特徴的な質問はアメリカらしさが抜け切らないし，フランスの特徴的な質問はフランスらしさが抜け切らない．これはこれでよい．このほか，高度に工業化された国ではそれらに共通する質問が存在する．また人間の根源的なもの —— 喜怒哀楽・好きなもの（快）はよいし，嫌いなもの（不快）はいやだという感情など —— はどこにも通用するものである．こうした，相互に係わりあう質問群を含む調査票を用いて調査しなければ同異の姿は描けない．これを質問の鎖という．

時間的経過は，時間の鎖となる．時間的経過は，似ているところと異ってくるところを示すから当然鎖となってくる．これは，各文化圏の人々に対する時系列調査によって明らかになってくる．

CLA は，この三種の鎖を総称したものである．こうした立場から研究を進めてきているが，その空間的拡がりは図1に示すところまできている．さらに，1992, 1993 年にイタリー，オランダと鎖の輪が増大されることになっている．時間の鎖は日本人に対する 35 年間（5年おきに8回の調査），ハワイでの5年おきの4回調査，アメリカの2回の調査（10年おき）である．